赤木島彦著

自選歌集

十年

現代代表短歌叢書第二篇

表紙装幀 恒田森伯友画

改造社版

自選歌集

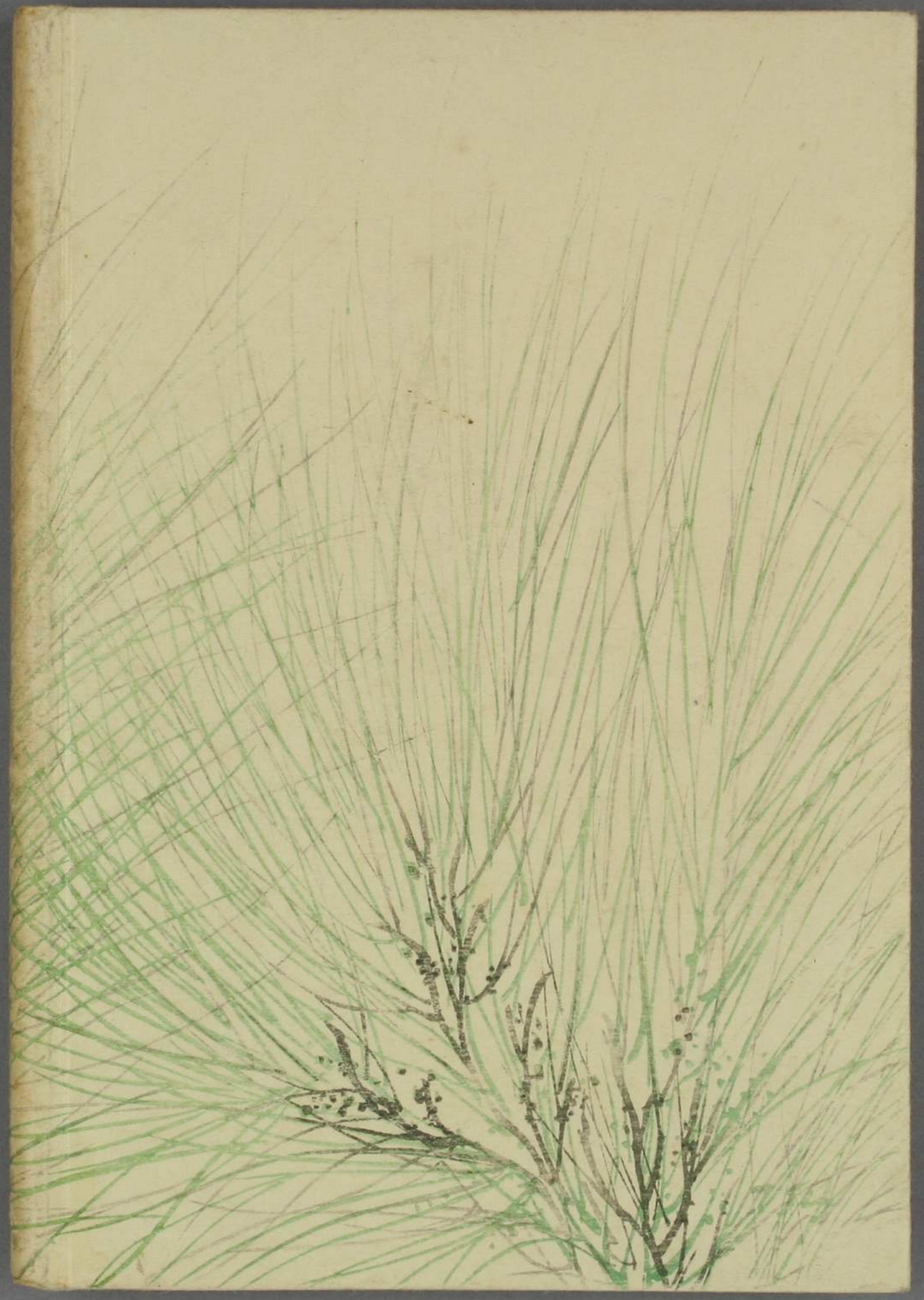
十年

島木赤彦著

改造社

大14 ア一

白鳳
歌集
十
作

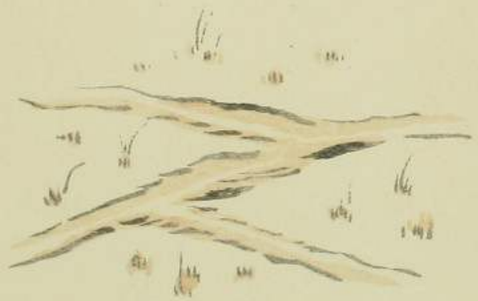


自選歌集

十年

島木赤彦著

改造社



十年目次

「切火」より……一
大正二年……三
大正三年……五
「氷魚」より……一三
大正四年……一五
大正五年……一八
大正六年……二七
大正七年……四三

大正八年……五八
大正九年……六七
「太虚集」より……七三
大正九年……七五
大正十年……七八
大正十一年……九三
大正十二年……一一〇
大正十三年……一三二

目次終

「切火」より

二百六十三首中二十一首採錄

大正二年

諏訪湖一首

まかがやく夕焼空の下にして凍らむとする湖の静けさ　原作一二句「夕焼空焦げきはまれる」

人に告ぐる悲しみならず秋草に息を白じろと吐きにけるかも　御牧ヶ原

子の眼病に重大なる宣告を受け即日上京して入院せしむ

空罎に煙草のほくそ拂ひたる心あやしく笑へざりけり

大正三年

家を出でて單身東京に住まんとす。　五首

古土間のにほひは哀し妻と子の顏をふりかへり我は見にけり

原作「古家の土間の匂ひにわが妻の顏をふり返り出でにけるかも」

日の下に妻が立つ時咽喉長く家のくだかけは
啼きゐたりけり

幼なき手に赤き銭ひとつやりたるは術なかりけ
るわが心かも　子どもら送り來れるに

この朝け道のくぼみに殘りたる春べの霜を踏
みて別れし

雪のこる土のくぼみの一と所ここを通りてな
ほ遠行くか　輕井澤にて

白雲の山の奥がにはしけやし春の蠶を飼ふ少
女なりけり　原作第四句「春の蠶飼ふと」

太陽ぞ炎の上に堪へにける炎の上に搖するる
太陽　青草を積みて燒く。一首

夜の燭いたも更くれば歌澤の絃は芒にならむとするも

○

衢風はや秋ならしぬば玉の夜の目にしるく雲流れ見ゆ

○

硝子戸に夜の雨流れゐたりけり寢むと思ひつつ寂しくもあるか　下宿にて

まことにも島に來つるか眼のまへの山みな搖れて近づくわが船　八丈島八首

月の下の光さびしみ踊り子の體くるりとまはりけるかも

島芒舌にあつれば鹹はゆし心さびしく折りにけるかな　原作第四句「ここに寂しく」

椿の蔭女音なく來りけり白き蒲團を乾しにけるかも

はらはらと蒲團をすべる椿の花土にぞ止まる晝は深けれ

この夕蒲團の綿のふくらみに體うづまり物思ひもなし　原作第一句「夜を寢ぬれ」

蔦咲く岩の上高み島の子の冷たき手をば引き上げしかも

常磐木の林の中に家有らしある時は子の泣き聲聞ゆ

「氷魚」より

八百七十九首中百五十八首採錄

大正四年

白樺の木のあひの雪のいたく消えて雨止みにける朝の寒さ　原作第四句「春の雨止む」

草家にしみじみ妻と座りけり桑の畑に雨ふる音す　歸國二首

夜おそくわが手を洗ふ縁の上ににほひ來るは
胡桃の花か

遠空の山根に白く雲たまり著るしもよ梅雨あ
がりの雲

來て見ればおくつきのへの隱り水あさざの花
は過ぎしにやあらむ　左千夫三週忌

しらしらに障子白みて牛乳の車の音す疲れし
頭に

眠りたる女の童子の眉の毛をさすりて我は歎
きこそすれ　歸國一首原作第四句「父は」

寒き國に父はいませり歩みゆく山かひの霜の
ひと日とけざる

大正五年

赤電車我を追ひ越し見えずなれり夜寒の坂を
のぼりゆく一人

足曳の山の白雲草鞋はきて一人い行きし人は
かへらず　長塚節一週忌一首

暁近く砲工廠の音きこゆ疲れて我は煙草をす
ふも

暁がた枕をしたるものゆゑに我の頭は疲れ
て眠る

工場は四時に笛鳴り五時に鳴り未だ暁けねば
我は眠るも

何ゆゑに便り絶えしか分らねば夜をつくし思ふ我は座るも

沈む日を止めし得ねば惜しみつつ山を下りぬ
また逢はめやも

絶えまなく嵐にゆるる栗の毬にうち群れてゐる燕は飛ばず

嵐のなか起きかへらむとする枝の重くぞ動く
青毬の群れ

故郷の湖を見れば雛燕青波に舞ひ夏ふけにけり

いそのかみ古杉の下の神の田は穂を孕みけり
注連縄を張りて　諏訪下社

雨に似て音こそすなれ家そとの桑の畑に山風は吹き

歸國四首

桑原の茂り夜ぶかし杜鵑このごろ啼かずと妻の言ひつる

小夜更けて桑畑の風の疾ければ土用螢の光は行くも

いとどしく夜風にさわぐ桑畑に天の川晴れて傾きにけり

木を離るる大き朴の葉すみやかに落ちて音せりこの山の池に

木の上に鴉は啼けり上野山土にあまねく霜ふる時か

十日ばかり病の床にありしかば十七夜忌に來て疲れたり

原稿を止めと言はれて止めたまひし大き先生を死なしむべからず　漱石先生危篤を聞く四首

あな悲し原稿のつづき思ひたまふ胃の腑には血の出でていませり

霜夜の風窓にしづまりておほけなし先生の道を思ひ見る一人

わが喉をいま通ふ息の音聞ゆ木枯の風とみに靜まり

硝子戸の外のも紅なる南天に雀動きて冬の日かげる

一人して病の床に横はる日數思へば冬至に近し

日はささず師走となりし窓の下體疲れて眠ること多し

大正六年

夕飯をはり小窓をあけて見れば日はあかあかと石ころの庭　下宿二首

畫のまの疲れをもちて手紙かく女中おつねの居眠りあはれ

いく度か霜は下りぬと吉備の山下心に歎かひ
冬をこもらむ　中村憲吉に

冬空の黄雲の光散りぽへり日の暮れ寒く筆を
動かす

汗垂りてのぼりて行きぬ五月雨の雲暗く行く
上富坂町　家を雑司ケ谷亀原に定めて妻子を國もとより招く。四首

硝子窓に流るる雨を眺めゐる我の心は人待ち
がたし

はるばるに家さかり來て寂しきか子どもは座
る疊の上に

うつり來ていまだ解かざる荷の前に夕飯たべ
ぬ子どもと並びて

いく日の曇りをたもつ岡の空の日ぐれに近し
雨蛙の聲

忽ちに夜は更けわたる龜原の青葉の上の十三
日の月

小夜ふけて青葉の空の雨もよひ光乏しく月傾
きぬ

月曇る青葉の道は寂しきか唄をうたひて通る
人あり

通り風過ぎて木擦れの音すなり枝々くふかく交
はせる赤松

赤埴の土は明るしひとりゐるわが目に見えて
松葉は散るも

松の木に我が凭りしかばたはやすく剝げて落ちたり古き木の皮

松風は吹きとよもせどわが笠に松の落葉はさはりて聞かゆ

火口原燒石原のからまつのおそき芽ぶきに嵐は吹くも

草の中の清水の槽の水あふれ間なく時なく流るる眞清水

川上に來りておそきわが汽車の吐く湯氣かかる川原の石に　岩手以北

溫泉に入りて一夜眠りぬ陸奥の山の下なる入海の音　淺蟲溫泉

雨曇り暗くなりたる森の中に　蜩鳴けば日暮かと思ふ

北海道二首

笹原の曇りにつづく大海を遠しとも思ふ近しとも思ふ

後志國余市なる伯母の墓に詣づ。四首

おほ伯母の墓は磯べの笹の原海より風の吹く音止まず

われ一人立ちて久しき笹山に海風吹きて曇りをおくる

のぼり立ち見る笹山は小さくて海はてしなしおくつきどころ

忙しみ常忘れゐて七年ののちなる今日に涙流るも

阿武隈の川の雨雲低く垂り水の音かそけく夕さりにけり

行く雲はかそかなれども谿につきて相聚まれり夕づく青原　富士見原

枯芝原草鞋を穿きてかへりゆく小學校の先生一人　牛禮

落葉松の色づくおそし淺間山すでに眞白く雪ふる見れば　淺間山五首

この原の枯芝の色に似て立てるからまつの葉は散るべくなりぬ

いちじるく雪照る山の下にして落葉松原は忽ち暮れぬ

山裾にありと知らるる川の瀬の音の聞ゆるこの夕かも

夕晴れの空に風あれや著るく淺間の山の烟はくだる

窓の外に白き八つ手の花さきて心寂しき冬は來にけり

一株の八つ手の花の咲きいでしわが庭の木にのこる葉もなし

霜どけの日の照りぬれば楓の木一ときに葉の落つるにやあらむ

野分の雨いたくあれたる壁のしめり一日乾かず日は照れれども　原作第五句「照らせども」

片寄りに烟は下る淺間根の雪いちじるし有明月夜

長子政彦國許より來りしに病むこと十日にして小石川病院に逝く。この日老父亦國許より上京す。

日の暮までおほ父の手をとりて悅びたはやすきかもわが子の命は

玉きはる命のまへに欲りし水をこらへてゐよと我は言ひつる

田舍の帽子かぶりて來し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず

山の村の隣人らに暇告げて來つる道には歸る
ことなし

子を守る夜の曉は靜かなればものを言ひた
りわが妻と我と

かぎろひの夕の庭に出でて見つかへることな
き命を思ひて

大正七年

いく日かここに籠れる乏しらに二階にとどく
冬木の梢

籠りゐて互に寂し時をりに二階の下に物音す
る妻

たえまなく嵐吹きゆく冬枯の林のなかゆ土埃あがるも　原作第三句「丘の上の」

雪はれし夜の町の上を流るるは山より下る霧にしあるらし　善光寺七首

雪の上を流るる霧や低からし天には満ちて光る星見ゆ

おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に來にけり

晝明かき街のもなかに雪を捲くつむじの風は立ち行きにけり

晴るる日の空に聳ゆる山門より雪のまひ散る風絶えまなし

雪あれの風にかぢけたる手を入るる懐の中
に木の位牌あり

雪ふかき街に日照ればきはやかに店ぬち暗く
こもる人見ゆ

紅梅の花をゆすぶる潮風の寒きに驚く湯の窓
をあけて

通り雨すぎて明るし赭土道の小松の花のしめ
りたる見ゆ

ひたぶるに我を見たまふみ顔より涎を垂らし
たまふ尊さ　諏訪山浦なる老父を訪ふ。　十二首

雪のこる高山裾の村に來て畑道行く父に逢は
むため

かへり來しわが子の聲を知りたまへり晝の眠
りの目をひらき給ふ

この眞晝聲するわれを床の上に遠眼をしつつ
待たせたまへり

夏芽ふく櫟林の家のうちに命をもてる父を見
にけり

若芽ふく櫟林は朝さむし炬燵によりて我が父
います

古田の櫟が丘の下庵にふたたびも見む父なら
なくに

われ一人命のこれり年老いし父の涎を拭ひま
ゐらす　わが兄三人皆夙く逝く

父とわれと相語ること常の如し耳に聲きくい
く時かあらむ

間なく郭公鳥の啼くなべに我はまどろむ老父
のへに

くれなゐに楓芽をふく窓のうちに父と我が居
るはただ一日のみ

日のくれの床の上より呼びかへし我を惜しめ
り父の心は　薄暮家を辭す

白雲の山べの川を踏みわたり草鞋は霑れぬ水
漬く小石に

母一人臥りいませり庭のうへに胡桃の青き花
落つるころ　高木なる我が家に歸る。六首

高三教科書にあり

庭のうへの二つ處に掃きあつめし胡桃の花は
いくらもあらず

大き爐にわが焚きつけし火はもえて物の音せぬ晝の寂しさ

政彦の足音きゝて鳴きしとふ山羊も賣られて
この家になし　亡子を思ふ

柿の木の若葉の上に紅き月のぼりて寒き夕となれり

この家に歸り來らむと思ひけり胡桃の花を庭に掃きつつ

夏ながら葉の散り落つる梅の木の下べの窓に
一人して居り　妻子を國に歸へす一首

岩山におほひかぶさる雨雲の雲脚平らに降り
つつあり

野分すぎて再び曇る夕べ空岩山の上に雲を下
ろすも

山の時雨疾く來りぬ屋根低き一筋街のはづれ
を見れば　飯山町行

この町のうしろに低き山の落葉踏みのぼり行
くわれの足音　恵端禪師の墓四首

石の上に櫻の落葉うづだかし正受老人眠りて
います

あわただしき心をもてりおくつきの櫻落葉踏
む我の足音

冬の雨あがりて寒し板屋根の低くそろへる街を見下ろす

霰ふる冬とはなりぬこの街に借りてわが住む二階の一室　番町の家

冬をとほす心寂しも物書きて肩凝りぬれば頸根をまはす

みぞれふりて寒けくもあるか向ひ家の屋根の下なるうめもどきの果

夜の街に電車の音の絶えしより時をへたりと思ひつつもの書く

大正八年

家うらの桑の畠によごれたる古雪たたき雨降りしきる

みじか日の障子明るし時をおきて裏山の風冬木を鳴らす

晝すぎとなりて日あたる縁さきの牡丹の冬芽皮をかぶれり

雪ふかき街道すでに昏くなりて日かげる山あり日あたる山あり

池田町三首

あらし吹く夕くらやみに踏みて行く川原の砂は踏みごたへなし

この驛の道ひろくして家低し雪の山おほくあらはれて見ゆ

今日うけし試驗危しと來て告ぐる子どもの顏は親しきものを

あな愛しおたまじやくしの一つびとつ命をもちて動きつつをり　原作第五句「あり」

鼻の息大きくなして告らしたるひたぶる言は大き言魂　想左千夫先生

赭土の山の日かげ田に紫雲英の花咲く見ればはるたけにけり

汽車のうちに夕べ聞ゆる山の田の蛙の聲は家思はしむ

水無月の曇りをおびて日の沈む空には山の重なりあへり　（湯温泉）

雪のこる峰並み立てり町なかに頭をあげて心驚く　大町。原作第二句「峰多くあり」

わが庭の柿の葉硬くなりにけり土用の風の吹く音聞けば

庭のうへの天の川原はこの夕まさやかにして浮雲に似たり

夏蠶桑すがれし畑に折りをりに降りくる雨は夕立に似つ

體の汗拭きつつおもふ今日このごろ蟬の少なくなりたることを

遠く來て夜明くる霧は道ばたの刈り田の株に
下りつつ見ゆ　歸國三首

霧ふかき湖べの道を來るらしき荷車の音久し
く聞ゆ

山下道小暗き霧のなかにして學校に行くわが
子に逢へり

雪ふれば山より下る小鳥多し障子の外に日ね
もす聞ゆ

子どもらのたはれ言こそうれしけれ寂しき時
にわれは笑ふも

二とせ前い逝きし吾子が書きし文鞄に入れて
旅立たむとす

二日居りし疊の上に煙草火の燃えあとのこし
我が去らむとす

都の空師走に入りて曇多し心疲れて障子を開
く

大正九年

冬空の日の脚いたくかたよりてわが草家の窓
にとどかず

冬の日の光とほれる池の底に泥をかうむりて
動かぬうろくづ

土荒れて石ころ多きこの村の坂に向むて入る
日の早さ

明りうすきこの部屋のなかに座りゐて痛みお
ぼゆる膝を伸ばすも

こゝにして坂の下なる湖の氷うづめて雪積り
たり　原作第五句「をり」

みづうみの氷に立てる人の聲坂の上まで響き
て聞ゆ

この冬は母亡くなりて用少なし心寂しと妻の
いふなる

この村につひにかへり住む時あらん立ちつつ
ぞ見る凍れる湖を

つぎつぎに氷をやぶる沖つ波濁りをあげてひろがりてあり

坂下の湖の氷のやぶるるを嵐のなかに立ちて見てをり

沖べより氷やぶるる湖の波のひびきのひろがり聞ゆ

みんなみの島べの道をわれ知れり一人歸り行く姿をおもふ　土田耕平大島より來る

「太虚集」より

四百八十首中百七十三首採録

大正九年

わが船にうねり近づく大き波眼のまへの島は
隱りぬ　金華山行七首

わが心ゆゆしきものか八重波のしき波のうへ
にいや靜まりぬ

潮のいろ深く透れり群だてる岩並みの底の見ゆるばかりに

往路船相川の岬をめぐる

わが心をたもちつつ居りよる波のうねりの底に蒼める岩むら

この海の水底にある岩のむれおほに見えつつ思ひ知られず

夕波の音にまぎれざる沖つ風聞きつつあれば
とよもし來る

草枯丘いくつも越えて來つれども蓼科山はな
ほ丘の上にあり

巖温泉三首

いくつもの丘と思ひてのぼりしは目の下にし
てひろき枯原

雪ふりて來る人のなき山の湯に足をのばして
暖まりをり

風に向ふわが耳鳴りのたえまなし心けどほく
ただ歩みをり

稚子の心はつねに滿ちてあり聲をうちあげて
笑ふ顏はや

桐の花のおつる靜かさよ足らひたる眠りより
さめてしまし居にけり

朝づく日透るを見れば茂山のはざまに靄はの
こりたるらし

茂山の木の間に靄ののこるらし淸しと思ふ光
透るも

時鳥夜啼きせざるは五月雨のふりつぐ山の寒きにやあらむ

夜ふけて寒しと思ふに五月雨の雨だりの音高まりにけり

降りしきる雨の夜はやく子どもらの寢しづまれるはあはれなるかな

五月雨の小止みとなりしひまもなし桑原とほく音して降り來

旅にありて若布をひさぐ少女一人降りしきる雨に霑れて來にけり

戸をあけて卽ち向ふ落葉松のしげりをとほす朝日の光

赤松の幹より脂の泌みいづる暑き眞晝となり
にけるかも

寂しめる下心さへおのづから虚しくなりて明
し暮らしつ

わが部屋の疊をかへて心すがし昨日も今日も
一人居にけり

桑摘みて桑かぶれせし子どもらの痒がりにつ
つ眠れるあはれ

栂の木の木立出づればとみに明し山をこぞり
てただに岩むら

木曾御嶽五首

夕ぐるる國のもなかにいやはての光のこれり
わが立つ岩山

踏みのぼる岩ほのむれの目に馴れてあやしく
明かき星月夜の空

星月夜照りひろがれるなかにして山の頂に
近づきぬらし

山の上にわが子と居りて雲の海の遠べゆのぼ
る日を拜みたり

天つ空遠のそぐへにあらむ船に我の心は行く
べきものか　森本富士雄の洋行を送る

日出づれば即ち暑しあかつきの雲の散りばふ
松林

夕ぐれの涼しさ早し山畑をめぐる林の蜩の
こゑ

野の川の水のつめたさよ薯掘りて爪にはさまれる土洗ひをり

この道や遠く寂しく照れれどもい行き至れる人かつてなし

歌集「藤浪」に題す。三首

この道やつひに音なし久しかる己が歩みをとどめて聽けば

現し身の歩みひそかになりゆくとき心に沁みていよよ歩まむ

皇太子殿下海外より還啓の日予は富士見原にあり

限りなく晴れたる空や秋草の花野に遠き蓼科の山

齋藤茂吉西歐に向ふ。四首

ひとつ日のもとにありとし思ひつついく年久にわれはたのまむ

いたづきのなほのこる君を海山のはたてにおきて思はむものか

益良夫は言にいはねども幼な子を船の上より顧みにけり

海も空もうるほひ澄める日の光船は遠きに向ひつつあらむ

山のべに家居しをれば時雨のあめたはやすく來て音立つるなり

光さへ身に沁むころとなりにけり時雨にぬれ
しわが庭の土

わが庭に散りしもろもろの木の葉さへさやか
に見えつあはれ月夜に

この朝け戸をあけて見れば裏山の裾まで白く
雪ふりにけり

湖べ田の稻は苅られてうちよする波の秀だち
の目に立つこのごろ

星月夜さやかに照れり風なぎて波なほ騒ぐ湖
の音

時雨ふる晝は圍爐裏に火を焚きぬこの寂しさ
を心親しむ

福壽草の莟いとほしむ幼な子や夜は圍爐裏の火にあててをり

福壽草のかたき莟にこの夕息ふきかけてゐる子どもはや

大正十一年

冬の日の暮るるに早し學校より一人一人に歸り來る子ども

冬ふかみ霜燒けしたる杉の葉に一と時明かき夕日のひかり

雪の上に落ちちらばれる杉の葉の凍りつきたるを拾ひわが居り

縁さきに干したる柿に日短し郵便配り食べて行きにけり

親鶏の腹の下よりつぎつぎに顔現はるるひよこらあはれ

静まりて親の嘴をつつきゐるこれのひよこは遊び倦みにけり

親鶏は知らぬに似たり居眠りてとづる眼蓋をつつくひよこら

おのもおのも親の腹毛にくぐり入るひよこの聲の心安げなる

腹の下にひよこを抱きて親鶏のしづまり眠る
その静かさや

親雀しきりに啼きて自が子ろをはぐくむ聞けば歎くに似たり

あかねさす晝のあひだの月うすし風吹きわたる楢若葉山

杉生山木ぬれの霧の散りぼひに見えそむるなりあかとき青空

風の吹く杉の木末を仰ぎをりうちゆすぶる杉の木末を

鴉啼く谷まの森に入りゆきて水を浴みけむ自が心あはれ

在歐中の茂吉を憶ふ

たえまなく鳥なきかはす松原に足をとゞめて
心静けき

有明温泉五首

いづべにか木立は霽きむつぎつぎに吹き寄す
る風の音ぞきこゆる

楢原ひろがりあへる若き葉にふりそむる雨は
音立つるなり

わが歩み近づきぬらし松原の木のまにひびく
山川の音

白雲の遠べの人を思ふまも耳にひびけり谷川
の音

山道に昨夜の雨の流したる松の落葉はかたよ
りにけり

小松原雨の名残りの露ながら袂にさはる青き
松かさ

いく久につづく旱りに蟬さへも生れざるらむ
聲の乏しさ　柿蔭山房

暑き日の眞晝まにしてもの書かむ心のそこの
しましし澄みつる

はやて風枝ながら搖る柿の實のつぶらつぶら
にいまだ青けれ

野分すぎてとみに涼しくなれりとぞ思ふ夜半
に起きぬたりける

つぎつぎに過ぎにし人を思ふさへはるけくな
りぬ我のよはひは　夜座

冬菜まくとかき平らしたる土明しもの幽けき
は晝ふけしなり

畠なかに手もてわが扱く紫蘇の實のにほひ清
しきころとなりにし

むらぎもの心澄みゆけばこの眞晝鳴く蟲の音
も遠きに似たり　子規忌

天遠く下りゐしづめる雲のむれにまじはる山
や雪降れるらし　姨捨驛にて

松風に時雨のあめのまじるらし騒がしくして
小夜ふけにけり　京都黒谷五首

この谷の松の落葉に霜白し木魚音するあかと
きにして

冬の日は低くしあれや日もすがら黒谷山の木がくりにして

わが友と朝の床に目ざめゐて物を言ふこそ親しかりけれ　中村憲吉黒谷を訪ひ來る

霜晴れの光りに照らふ紅葉さへ心尊しあはれ古寺　唐招提寺

扉ひらけばすなはち光流るなり眼のまへの御佛の像　法隆寺夢殿

明日香路をか行きかく行き心親し古人をあひ見る如し　明日香四首

天なるや月日も古りぬ飛ぶ鳥の明日香の岡に立ちて思ふも

わたる日の光寂しもおしなべて紅葉衰ふる古國原に

明日香川瀬の音ひびかふ山峽に二人言止みあるが寂しさ　中村憲吉と同行なり

わが庭に松葉牡丹の赤莖のうつろふころは時雨降るなり

このごろの光やうすきわが庭に時雨の雨は晴れにたれども

いや日けに青むみ空やこのごろは時雨のあめの降ることもなし

湖つ風あたる障子のすきま貼り籠りてあらむ冬は來にけり

長子政彦の逝きしは十二月十八日なりき

冬空の澄むころとなれば思ひ出づる子の面影
ははるかなるかな

旅にして逝かせたる子を忘れめや年は六とせ
となりにけるかな

霜月の眞澄の空に心とほりしまらく我はあり
にけるかな

冬と思ふ空のいろ深しこれの世に清らかにし
て人は終らむ

湖のへに朝ありける薄氷風吹きいでて碎けけ
るかな　諏訪湖

大正十二年

空澄みて寒き一と日やみづうみの氷の裂くる
音ひゞくなり

學校にて吾が子の飯の凍るとふ今日このごろ
の寒さを思ふ

鶇來てそよごの雪を散らしけり心に觸るるも
のの靜けさ

欠伸して出でし涙を拭きにけりもの書きふけ
る心のひそけさ

この眞晝入り來る人あり門の外に凍れる雪を
踏み鳴らしつつ

高槻のこずゑにありて頬白のさへづる春となりにけるかも

桑原の色いちじるくなりにけりこの降る雨に芽ぶかむとして

春雨の雲のあひだより現るる山の頂は雪眞白なり

ひよこらを伴れつつ歩む親鶏の間なくし呼ぶは思ふらむかも

生けるものなべて歎けり散ばれるひよこを呼ばふ親鶏のこゑ

土の上に白き線引きて日ぐれまで子どもの遊ぶ春となりにけり

風わたる遠松原の音聞ゆ昨日も今日も冴えかへりつつ

若葉して降る雨多し窓さきに濡れて並べる大槻の幹　高木今衛寓居

雨止みて木々の雫のいつまでも落つるいほりにあるが静けさ

若葉山降りすぐる雨は明るけれ鳴きをやめざる春蟬のこゑ　別所温泉四首

降りすぐる雨白じろし一と山の楮若葉のそよぐばかりに

春蟬の聲は稚けれ道のへの若葉に透る日の光かな

山かげに松の花粉ぞこぼれけるここに古りにし御佛の像　同所安樂寺二尊像

山にして遠裾原に鳴く鳥の聲のきこゆるこの朝かも　巖温泉八首

谷川の音のきこゆる山のうへに蕨を折りて子らと我が居り

裾野の原若葉となりてはろばろし青雲垂りぬその遠きへに

静けさよ雲の移ろふ目の前の山か動くと思ふばかりに

野の上に雲湧く山の近くして忽ちにして隱ろひにけり

水の音ききつつあれば心遠し細谷川のうへに
わが居り

山の上に花掘る子らを見つつをり斯のごとく
に生ひ立ちにけり

ここにして遙けくもあるか夕ぐれてなほ光あ
る遠山の雪

第十一回左千夫忌を修す。同年罹者多く會せず。年ゆき人散ずるの思多し

我さへや遂に來ざらむ年月のいやさかりゆく
奥津城どころ

夏の夜の朝あけごとに伸びてある夕顔の果を
津しむ我は

露に霑るる夕顔の果は青々し長らかにして香ひさへよし

夕顔は煮て食ぶるにすがすがし口に嚙めども味さへもなし

この山の杉の木の間よ夕焼の雲のうするる寂しさを見む

夏七月皇太子殿下富士山に登らせ給ふ。二首

青雲の八重雲の上にかしこきやわが日の御子のみ馬は向ふ

あり立たす山の頂は見えねども仰ぎてぞ思ふ青雲がへを

赤松の林のなかに微塵だに動くものなし日は
透りつつ

夏の夜の更けゆくままに心清し肌を脱ぎつつ
書きつぎてをり

埃づく芝生のうへにあはれなり日に照らされ
て人の眠れる

關東震災十首内宮城前一首

燒け舟に呼べど動かぬ猫の居り呼びつつ過ぐ
る人心あはれ

月よみののぼるを見れば家むらは燒けのこり
つつともる灯もなし

現し世ははかなきものか燃ゆる火の火なかに
ありて相見けりちふ

高田浪吉一家罹災。母及び妹三人行方を失ふ

一ぽんの蠟燭の灯に顔よせて語るは寂し生き
のこりつる

燒け跡に霜ふるころとなりにけり心に沁みて
澄む空のいろ

燒け跡に霜ふる見れば時は經ぬ夢のごとくも
滅びはてにし

うち日さす都少女の黑髪は隅田川べの土に散
りぱふ　被服廠跡二首

ありし日の老若男女あなあはれ分ちも知らに
なりにけるかな

ただ一つ燒けのこりたるものをもちて佛刻む
と聞くが悲しさ　高田浪吉一家假家に入る

この國の野の上の土のいろ赤しさむざむとして草枯れにけり

朝鮮四首

行きゆきて寂しきものか國原の土に著くなす低き家むら

久方の空ひろらなり鴨綠の流れのはてに低き山一つ

一と國の境をこえてなほ遠し雪さへ見えぬいやはての山に

枯原のをはりの磯に波よれりここに血を吐きてつひに止みけむ

金州は子規從軍の所

山の上ゆ近きに似たり明らかに海に落ち入る夕日の光

旅順二百三高地に登る二首

海の日の入りて明るき山の上ここに戰ひて誰か歸りし

わが村の貧しき人のはてにける枯野の面を思ひ見るわれは　黑溝臺戰跡遠望

枯原の夕日の入りに車ひく驢馬の耳長し風にい向ふ　奉天郊外

みたまやの青丹瓦にふりおける霜とけがたし森深くして　奉天北陵

東の月かも早き枯原のはたての雲は夕燒けにつつ　長春行途上

庭つづき枯草原にあたる日の光こほしみ出でて歩みつ　鞍山なる矢澤氏宅

遠嶺には雪こそ見ゆれ澄みにすむ信濃の空は
限りなきかな

からまつの落葉はおそし野の空の澄みの深き
を思ふこのごろ

冬空の晴れのつづきに落葉したるからまつの
枝は細く直なり

からまつの落葉たまれる細徑は踏むに柔かく
こころよきかも

大正十三年

冬枯れて久しき庭や石垣の苔をついばみて小雀の居り

石を踏み苔をついばむこがらめの行ひ疾し松に移りぬ

いくばくもあらぬ松葉を掃きにけり凍りて久しわが庭の土

みづうみの氷は解けてなほ寒し三日月の影波にうつろふ

春山に木を樵る子らは思ひなからむ遠く居りつつ物言ひかはす

よべの雨に小徑の石の現はれてすがしくもあるか散る松の花

白雲の下りゐ沈める谿あひの向うに寂しかつこうの聲　蓼科山の湯三首

前山の風に吹かれて來る雨か櫟若葉に日はあたりつつ

ふる雨に音するばかりこの山の櫟若葉はひらきけるかも

諍ひを我に止めよといふ人あり自からにして至る時あらむ

山の上の栂の木肌は粗々し眼に沁みて明けそめにけり　燕岳三首

高山の木がくりにして鳴く鶯の聲の短かきを
心寂しむ

わが齢やうやく老けぬ妻子らとお花畑にまた
遊ばざらむ

歌集十年 終

巻末小記

○

改造社から出す短歌叢書中へ小生のを加へるにつき、既作中から三百五十首を選出せよとのことで、昨年末著手した。小生の歌集は太虚集を最近として、氷魚、切火、馬鈴薯の花等があり、それ以前のも雑誌へ收められたものが可なり多く、中村憲吉君の選んでくれた島木赤彦選集にその小部分が載つてゐる。これを機として、ずつと前の、さういふものから今日までのを選んで見ようと思ひついて、やつて見たが、數が多過ぎて、とても

三百五十首には纏まらない。そこで馬鈴薯の花及びそれ以前は他日別に纏めることにし、今回のは切火、氷魚、太虚集から選出することにした。大正二年後半から大正十三年初めに至る十年間に當るゆゑ、この自選集を「十年」と名づけた。

この間の歌數千六百二十三首である。それから三百五十首選出するといふことも少々難事であつた。標準を高くすれば數が減り、愈々高くすれば愈々減り、標準を緩るめると數が殖えすぎるといふ具合である。併し、叢書として出すのであるから、規定の數と餘り距つては惡いと思ひ、どうにか彼うにか三百五十二首に切り縮めた、斯る有樣ゆゑ、選中のものの必しも選外より優らず、選外に猶惜しいと思ふもあり、選内にあつて猶如

何かとするものも交じつてゐる。この邊になると、作者自身の特別な愛著が出て迷ふのであるが、いつまで迷つて決まる譯でないから、この邊で打ち切ることにした。

十年間に三百五十二首はあはれである。中に、數首十數首の名作でもあれば、それで滿足してよいが、それは覺束ない。十年の爲事ここに出でざるは歌つくりの悲哀とも思ふ。併し、小生はまだ死なない。今後の心がけによつて何等かの域へ到著せぬとも限らないと思つてゐる方が心强い。さういふ時があるとすれば、過去十年の爲事は皆その基礎になるであらうと思ふと幾分心持がいい。之れは自ら慰める所以である。年に依つて序を分つたのは足跡の變遷を攷へるに便なるためである。

この集を編むに當つて過去の作を訂正したものがある。さういふものは、半ば大正十四年作であるとも言へる。この關係如何かと思つたゆゑ、訂正のものは、下に六號活字で原作を示しておいた。

太虛集は古今書院より、氷魚は岩波書店より出版してゐる。（切火は絶版である）それ等を併せ讀んで頂けば小生の幸福この上もない。

昨朝東京より歸り、今日少し疲れて床の上に在り、外は春雨が降つたり止んだりして、梅が少し開き、櫻の蕾が赤らんでゐる。信濃の春は遲いが、これから少し心持よい時節が續くであらう。これで筆を擱く。

大正十四年四月二十二日

諏訪湖畔高木邑の草房にて島木赤彥記す

大正十四年五月十日印刷
大正十四年五月十五日發行

十年
定價一圓五十錢

著者　島木赤彥
發行者　山本美　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
印刷者　石川金太郎　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

發兌　改造社　東京市芝區愛宕下町一丁目一番地　振替東京八四〇二番　電話高輪四九九三番

株式會社秀英舍印刷所

自選歌集

齋藤茂吉著	朝の螢	定價 一・五〇 送料 ・一八
島木赤彥著	十年	定價 一・五〇 送料 ・一八
古泉千樫著	川のほとり	定價 一・八〇 送料 ・一八
中村憲吉著	松の芽	定價 一・八〇 送料 ・一八
折口信夫著	海やまのあひだ	定價 一・八〇 送料 ・一八
木下利玄著	立春	定價 一・八〇 送料 ・一八